

福岡 経済 科学・環境

「北九州風力ウイーク」市立大がワークショップ



横田 理美



+ 拡大

最新の風力研究についてオンラインで報告する九州大の内田孝紀准教授

北九州市で7、8日に開催される「世界洋上風力サミット2021」（日本風力発電協会主催）に合わせ、北九州市立大は4日、再生可能エネルギーに関する学術ワークショップを小倉北区の北九州国際会議場で開いた。サミットを共催する市は3～8日を「北九州風力ウイーク」と位置付けており、5日には風力発電の人材育成に関する産官学のシンポジウムが開かれる。

ワークショップでは、国内6大学の教授らが、主に洋上風力発電をテーマに最新の研究内容を報告した。

九州大の内田孝紀准教授は、洋上風力発電所の建設計画が進む響灘地区（若松区）での風力研究についてオンラインで発表。風車の羽根が回ると後方に空気の渦ができるが、複数の風車が連なると渦が干渉し合い、空気の流れが乱れて発電ロスにつながることを紹介した。

響灘地区は海側の風に加え、異なる高さの建物と地形により予測が難しい陸側の風も考慮する必要があり、同大がシミュレーションを進めているという。内田准教授は「シミュレーションに基づいた風車の配置や（空気の流れの）マネジメントが成功の鍵。響灘地区は日本（の洋上風力）が解決しなければいけない課題を含んだ重要なエリアだ」と指摘した。

（横田理美）